青井記念館美術館

はぐくみ会だより

第 37 号

平成26年４月１日

所蔵作品紹介 (36)

「生」（日本画）

郷倉千靭作

（縦 60×横 72cm）

郷倉千靭（本名・與作）先生は、１８９２（明治25）年、射水郡小杉町（現射水市）生まれ。本校漆工科（明治43年卒業）、東京美術学校（現東京芸術大学・大正４年卒業）日本画科に学び、院展を中心に活躍します。１９７２（昭和47）年には日本芸術院会員に任命され、１９７５（昭和50）年、83才でこの世を去るまで、写実を基盤に花鳥画や仏教美術を題材にし、自然や動物に対する情愛やロマンあふれる作品を数多く描きました。また、画塾「草樹社」を創設し、多くの後進を育成。院展の北陸巡回も発案、実現に向け尽力しました。

筆者が富山県民会館美術館の担当時、「郷倉千靭回顧展」準備の為、東京・深沢の自宅を訪ね、富山県主催の展覧会を来年の４月に企画していることをお話し、快諾を受け進めておりました折り、お会いしてから半年後、あのお元気な先生が亡くなられたとのこと、急きょ「郷土が生んだ日本画家・郷倉千靭遺作展」として、昭和51年４月に開催。先生の人柄にふれた企画展は、40年たった今も深い思いの美術展です。

本校所蔵の「生」は、千靭先生最晩年の傑作、今まさに誕生したばかりの雛を慈愛溢れるまなざしで、見守っている親鳥との構成がとても印象的である。豊かな大地に生まれて、大きく成長することを願っている作者の思いが伝わってくる。画面の下部はとても色彩豊かで自然の楽園と言った風であるが、上部に目を転じると何故か黒い太陽が異様に写り、空の色もくすんだトーンになっている。この取り合わせがより一層親鳥の祈りにも似た思いが見るものに伝わり、新たな感動を呼び起こさせる。

（文責　青井記念館美術館長　山本　實）

第20回 青井中美展

11月14日(木)～12月1日(日)

青井中美展も多くの方々のご支援とご協力に支えられ、今年度で第20回展を迎えました。

県内全ての中学校を対象とした美術公募展として広く周知され、今年は参加校44校、応募作品数613点、うち入選329点となり、平均入選率は53.6%でした。期間中は、中学生をはじめとする859名の来館者があり、盛況のうちに幕を閉じました。

各賞受賞者

青井大賞	荒谷野乃香	(新湊南部)
富山県知事賞	脇本一咲	(津沢)
富山県教育委員会教育長賞	波多野世唯	(中田)
最優秀賞	西航大	(石動)
優秀賞	藤永遥登	(庄川)
富山新聞社優秀賞	齋藤夢加	(庄川)
チューリップテレビ優秀賞	高辻夏	(高陵)
優良賞	川嶋航平	(津沢)
優良賞	川崎夏子	(桜井)
富山新聞社優良賞	舟戸葵	(庄川)
富山新聞社優良賞	村本康輝	(津沢)
チューリップテレビ優良賞	髙純麗	(氷見西部)
チューリップテレビ優良賞	折口奈々緒	(平)
佳作	太田奈央	(芳野)
佳作	山田裕也	(井波)
佳作	細池悠月	(津沢)
佳作	長野友映	(芳野)
佳作	大家美奈	(石動)
佳作	高倉絵吏	(高陵)
佳作	藤井志保	(高岡西部)
佳作	島佳樹	(庄川)
佳作	竹内彩人	(石動)
佳作	勝見風太	(戸出)
佳作	田口優依	(西條)
特別賞	沼群	(戸出)
特別賞	吉江まりな	(福光)

●青井大賞
「最後の一振り」 射水市立新湊南部中学校三年 荒谷野乃香さんの作品

今回、青井大賞をいただき大変嬉しく思います。「最後の一振り」は、私が所属していたソフトボール部の最後の試合で、ホームランを打ったときの一振りを残したくて制作しました。

発砲樹脂で作るのは予想以上に難しく、四角い発砲樹脂を体のラインに近づけるよう削り、貼るという作業の繰り返しでした。私が一番気に入っているところは、上半身のねじれを材料の斜め貼りで表現したところです。

この大賞をいただいたことを励みに、もっと造形を勉強し、いろいろな作品作りに挑戦していきたいです。

●富山県知事賞
「響」 小矢部市立津沢中学校三年 脇本一咲さんの作品

この度は、青井中美展で富山県知事賞をいただき、とても光栄に思います。

この作品に「響」という題名をつけたのは、絵から本当にトランペットの響きが伝わってくるような作品にしたかったからです。見いたところは口元です。トランペットを吹くときの筋肉の締まりなどを表現するのがとても難しく、口元だけでも多くの色を使い、納得がいくまで描きこみました。他にも、人物と背景が混ざらないように、人物の周りに軽く影を落として人物を際立たせるなど、いろいろな工夫をしました。

この絵を描き上げることができたのは、描き方の指導をしてくださった先生方、時々絵を見に来てくれて、励ましの言葉をくれた友達のおかげです。皆の支えへの感謝を忘れずに、これからも作品を作っていきたいです。

●富山県教育委員会教育長賞
「生命力」 高岡市立中田中学校三年 波多野世唯さんの作品

「花」そのものを表現する。

私がまず「生命力」という作品を描くうえで一番悩んだのは花をデザイン的にどう表現するか、また、花そのものをどう表現するかということでした。花は触るとすぐに萎れてしまいそうなほどに花弁が薄くて軟らかく、だけど力強い生命力を持っています。花の弱さは何枚かの花弁をステンドグラスのようにしてガラスを表現しました。花の強さは画面全体に花を大胆に描きました。色彩は花の美しさを伝えたいと思ったのできれいな色を使いました。

賞をもらえたのはきっと周りの人の支えがあり、そして自分が作品に対する強い思いをずっと作品制作中忘れずに持ち続けたからだと思います。身の回りのささいなことに目をむけるだけで世界が違って目に映ること、"日常"こそ大切にするべきものだということを今回の作品制作で気付くことが出来ました。

第84回 同窓生ギャラリー

「南砺の5人「継承と挑戦」」

本校を平成9年、工芸科卒業の小原好喬(南砺市出身)は、城端蒔絵、塗師屋 治五右衛門の16代目。今回の作品は、城端蒔絵の特徴の一つ、軽粉(塩化第一水銀)を駆使しながら、伝承の密陀絵法で、菊・紋白蝶の白を表現、白漆の特徴を生かした蒔絵の仕事を見せる。同級生の田中孝明(広島県出身)は、井波彫刻・もの作りの世界に入り、木彫で人物像にとり組み、顔や手を脱色、肌の色合いを現す、独自な像を制作。田中早苗(横浜市出身)は、高岡で色漆を学び、乾漆法でシンプルな色合いの作品を緻密に創り出す。村田佳彦(桐生市出身)の現代茶道具は、フォルムの斬新さと漆の仕事が良い。森つくし(札幌市出身)の「花器」は、陶器の表面に弁柄(紅殻)を塗布、やわらかな深みの紅色が映える。5人は南砺の地で、曳山修復を通じて集まった若き作家たち、伝統を受け継ぎ個々の制作に挑み続ける。

平成25年12月10日(火)～平成26年1月19日(日)

課題研究作品展

2月22(土)～3月2日(日)

「ものづくりを通して」

学校長　松井　裕敏

平成25年度課題研究作品展は、青井記念館で開催されました。展示された作品は、本校三年生が「課題研究」の授業を中心に、個人またはグループで一年間かけて取り組んできたものです。課題研究は、基礎的・基本的な学習の上に立って、課題を自ら設定し、その課題の解決を図る学習を通して、専門的な知識と技術の深化、総合化を図ると共に、問題解決に向けて意欲的に取り組む能力や自発的、創造的な学習態度を育てることをねらいとしています。

展示に先立ち二月二十日には、七学科の代表作品の発表会がありましたが、どの発表も各学科の特色を出したすばらしいものでした。

また、三月一日の卒業式の後には、多数の保護者やご家族の方々が見に来られ、「素晴らしい」「さすが高岡工芸の作品だ」など大盛況でした。開催された八日間で、延べ千人以上の方々が見学されました。

卒業生の皆さんには、この経験を生かして、それぞれの道で頑張って欲しいと思います。

平成25年度　各科最優秀賞作品

機械科
全自動工場用掃除機の製作

電子機械科
反射系リズムゲーム
～Jubeatの完成に向けて～

電気科
SRS（Score Reading System）製作

建築科　可動する家

土木環境科
コンクリートカヌーの製作

工芸科　デスク

デザイン・絵画科
「富山の水」から展開する商品計画

「卒業制作を終えて」

平成25年度　工芸科卒業生　柿田　成実

私は卒業課題でデスクを制作しました。それまで工芸科の木材工芸コースで学んだ技術を生かし、デザイン性を特に重視した作品に仕上げました。全体的に柔らかなイメージになるように曲線を採り入れました。制作の前にデザインを考えていくのですが、どこにでもある四本脚の机になってしまい、オリジナルの気に入った形にまとめるまでとても時間がかかりました。そのため、家に部品を持ち帰って作業することがあったり、先生に手をお借りしたこともありました。しかし、それだけ細部にまでこだわったからこそ、この作品が出来上がったと、とても満足しています。

卒業課題制作はとても辛いこともありました。ですが、完成したときの達成感とうれしさを感じたとき、今までの積み重ねは無駄ではなかったのだなと実感することができました。そして3年間を通してものづくりの楽しさや厳しさなどを学ぶことができたので、それを今後にも生かしていきたいと思います。

第85回　同窓生ギャラリー

「一期一会2014」

さまざまな分野の作家でつくる実行委員会（林正人委員長・S59年デザイン科卒）が毎年開き、ことしで14年目になる。富山、石川と東京近郊で活躍する作家が、陶芸、木工、アクセサリー、ブリザードフラワー、銅版画、オリジナル時計、キャンドルなど15名の参加会員、合わせて約500点を展示した。

羊毛フェルトを使った動物のマスコットや、真鍮で文字盤を手作りしたアンティーク風の時計、銅版画の作品と銅の原板を展示し、繊細な仕事を見せる。木工芸作家は、木の材質・色味を生かして、オブジェに取り組んだ。

新しい造形、豊かな個性でこれからも尚一層研鑽を積まれ、魅力ある作品を発表していただきたいと思います。

平成26年1月26日(日)～2月16日(日)

第86回　同窓生ギャラリー

「山田栄龍　日本画作品展」

本校の金工科を昭和35年卒業。山田栄龍氏は72才、約40年前から日本画を描いている。今回は約30年前から近年までに制作した作品のうち24作品を展示。身近な情景を描いた6号から100号の力作を発表。

高岡市民美術展・富山県美術展を舞台に挑戦、自宅の玄関から庭を描いた作品、近くの小矢部川に設置された水門、重厚な蔵の壁をモチーフにした大作など、公募展で入選を重ね、常連作家となる。

本校金工科在学中は、授業のなかで鍛金、鋳金、象嵌など金工過程を学ぶ中、作品の下図やパースに絵筆をとっていた。十代の頃の感性を持ち続け、独自の表現を追求している。

会期中、中学の同級生、高校のクラスメイト、会社の元同僚、地域の方々など、多くの来場者があり、山田さんの人間味にふれる展覧会でした。

平成26年3月8日(土)～4月6日(日)

常設展Ⅲ期　仏教美術展

平成25年12月10日(火)～平成26年1月19日(日)

当館が所蔵する仏像・仏画の作品から、仏教美術展を企画。江戸期に描かれた、日本画・「愛染明王図」「虚空菩薩図」(作者不詳)と「十六羅漢図」(久隅守景)は所蔵品の中でも最上級の資料であり、保存状態も良い。特に、久隅守景は狩野探幽門下の逸材、寛永から元禄(1624－90)に活躍。加賀藩三代藩主前田利常の時代、瑞龍寺に探幽と共に守景が山水図襖を描いている。羅漢図が本校に所蔵された経緯に興味が湧く。

彫刻・仏像作品の優品も多数所蔵。明治27年の開校以来の教授や彫刻家の秀作を展示。明治期の作、本保喜作の「出山釈迦像」は、一木作り木彫(高さ2、15m)の大作。同じ題名の畑正吉・木彫像との秀作対比も楽しめた。

文化勲章受章作家、澤田政廣「不動明王」(木彫像)は、憤怒の表情を実に良く現し、政廣・傑作の一点。工芸品の作は、明治期に制作された、鋳造鍍金像「薬師観音」と陶器の観音像など、全体で26点を展示。

仏教誕生から千年もの歳月を費やして日本に到達、多彩な展開を示してきました。日本独自の様式を作り上げてきた仏教美術、本校美術館のコレクションにも息づいています。

常設展Ⅳ期　高岡銅器名品展

平成26年3月8日(土)～4月6(日)

当館の所蔵品、約800点を有する中で、金工に関する資料は200点余り、貴重な作品群を所蔵しています。今回の展示では、明治の制作年になる作品を中心に、30点の名品を展示しました。

高岡銅器(金工)は、1609年の開町間もなくより始まったと伝えられています。溶けた金属を型に流して物を作る「鋳物（鋳金）」の技に優れていました。江戸時代は日本一多くの職人がいたといわれています。明治時代以降は「彫金（象嵌）」の技や、「蝋型鋳造」など多くの技がありました。今回の展示作品では、江戸蝋型を高岡の地で伝承した、初代須賀松園「銅製花瓶」は、鼓型のシンプルなデザイン、極限まで研ぎ澄まされた蝋型作品。明治期の名品、関義平「狆　置物」・中杉与三七「鷹文様花瓶一対」など彫金の技巧を極めた作品群。金工の粋を、明治・大正・昭和の時代別に展示した。

寄贈作品の紹介

◆林　良一　作　本人寄贈（伊万里市在住）

「Liy」(ミクストメディア)

「nana」(ミクストメディア)

◆佐藤カオル子　作　本人寄贈（高岡市在住）

「夢時間 1991」(油彩)

「夢時間 1993」(油彩)

◆荒谷野乃香　作　本人寄贈（射水市在住）

「最後の一振り」(塑像)

はぐくみ会会員募集のおしらせ

はぐくみ会では会員を募集しています。申し込まれた日から一年間会員となります。

主な活動
・青井記念館美術館への協力・支援
・中学生美術展(青井中美展)への支援

特典
・企画展等の案内
・はぐくみ会だよりの配布

年会費
一般会員(個人)　二、000円
特別会員(企業、団体等)　一0、000円

お問い合わせ・申し込み先
青井記念館美術館はぐくみ会事務局

編集後記

今年度は、前半期の特別展二つを含め、同窓生ギャラリーと合わせて企画展が9回も開催され、多種多様な展覧会で大いに賑わいました。特に、後半期は第20回青井中美展から始まり、第84回、85回同窓生ギャラリーと続き、学校行事展の課題研究作品展と、若い学生や作家の作品展が目立ちました。若い作家や学生達のエネルギッシュで斬新なアイディアの作品の数々を見ていると、彼らの今後の活躍が楽しみでなりません。当美術館でも、もっと多くの若い芸術家の皆様に利用していただけるように、青井記念館美術館を広くお知らせしていけるよう尽力に努めたいと思います。

前任者の古海さんの後任として昨年11月より、再度美術館の事務員として勤務させて頂くこととなりました。よろしくお願いいたします。（中野雅恵）

編集発行
富山県立高岡工芸高等学校
青井記念館美術館はぐくみ会
住　所　〒933-8518 高岡市中川一-一-二〇
TEL (〇七六六)二一一-一六三〇
FAX (〇七六六)二一一-一六三一

＊青井記念館のホームページを開設しております。
http://www.tym.ed.jp/sc350/aoi/index.htm